北京オリンピック出場

フェンシング男子フルーレ個人
千田健太さん（文学部5年）

努力重ね、父子2代の夢を実現
アタックの技磨き、低身長カバー

3月ポルトガルW杯で出場確定

北京五輪出場を確定したのは3月16日、ポルトガルで行われたW杯。「最後の方はどうなるかと思っていました」。ポイントが足りるかどうか不安で、順位が決まるまで気を抜けなかった。焦る気持ちもあった。

結果は意外にあっけなかった。成績で与えられるポイント数で競争相手とみられていた外国人選手が敗れたため、千田さんの総合ポイントが上回ったのだ。

男子フルーレ個人で五輪に出場できるのは、世界ランキング上位8人、大陸枠8人、大陸予選から8人の計24人。千田さんは世界ランク14位だが、アジア枠で2番目に入った。

五輪出場が決まって真っ先に報告したのは、父親の健一さんだった。電話口で父は「良かったな。おめでとう」と喜んでくれた。でもちょっと素っ気なかった。帰国し、実家に帰ったときは違った。顔を合わせた父に、「めっちゃ、褒めちぎられました」。そう語る千田さんからさわやかな笑顔がこぼれる。

〝幻の五輪代表〟だった父

千田さんの大きな支えとなってきたのが父の存在である。

28年前（1980年）のモスクワ五輪。西側諸国は日本を含め、ソ連のアフガン侵攻（79年）に抗議し、出場をボイコットした。千田さんの父親・健一さんは、その時出場断念を余儀なくされた〝幻の五輪代表〟だったのである。

千田さんがフェンシングをはじめたのは中学1年。父から勧められたわけではなく、自分から「やりたい」と告げた。しかし、父の指導は厳しかった。高校は、父が指導していた気仙沼高校（宮城）に進学したが、「高校ではなぜか竹刀で殴られました（笑い）。いつも（部員への）見せしめに自分が怒られるんです」。

右利きだったのを「左利きの方が有利だ」と左利きに無理やり矯正された。日常生活でもすべて左手を利き手にした。

闘志を秘めたさわやかな笑顔

フェンシングを「何度もやめようと思った」という。しかし、高校3年で高校総体フルーレ個人3位になり、父から「監督の立場としてみんなの前で息子に甘くできなかった。今まで厳しくして悪かったな」という言葉を聞いた。そのとき、フェンシングを続けていこうと決意した。

大学入学で父から自立

その後、中央大学に入学。実家を離れ今まで頼りにしていた父の存在はもう近くにはいない。「自分で何とかしなければ」という思いから、千田さんはひたすら練習に取り組んだ結果、「距離感がつかめるようになり、相手の剣のスピードが見えるようになった」。その後、メキメキと上達、自らもその成長をはっきりと感じた。その勢いで千田さんは各大会で次々と見事な成績を収めていく。そして3年の時、ナショナルチームに加わる。

「北京を意識しだしたのはこのころです。日本協会の人に生活費などお世話になってからですね」

右利きだったのを左利きに矯正した千田さん

左足太ももの周囲62センチ

昨年1年間は生活のほぼ全てをフェンシングに捧げた。「朝9時に練習を始めて、夜9時に帰宅する毎日でした」。毎日レッスン40分、練習試合3時間、その他トレーナーにくんでもらったトレーニングが週に4～5日、日曜は休み。「食事と体力維持には気を使いました。睡眠時間は最低8～9時間とります」。

身長170㎝。大きくない。胴体が有効面で突きだけのフルーレでは、身長が高く、手が長い方が有利に違いない。「背は北京代表の中で一番低いです。それをカバーするために練習では、相手の出際を狙った技や、左利きを生かした技や、アタックのバリエーションを増やしたり。今はどうやったら上位に行けるか常に考えています」。

左足の太ももは62センチもある。練習と研究熱心の「証」だ。

5月の高円宮W杯で7位

5月、東京で行われた高円宮杯W杯で、アテネ五輪銀メダルのイタリアのサルバトーレ・サンツォ選手に勝った。「久しぶりにうれしかったですね。北京を前にいい自信になりました」。日本勢最高の7位になり、五輪でのメダルも充分期待できる。

「北京が決まってからは父の方が自分より必死でした。他の選手のビデオ研究をして、送ってくれます。フェンシングのことを知っている父だから自分も素直に父の話を聞けたんだと思います。そうじゃなかったら聞けなかった」

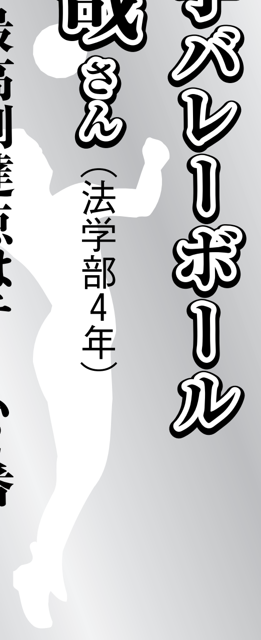
五輪出場という父子2代の夢はかなえられた。「北京五輪出場は育ててもらった父への恩返しだと思っている」という千田さんの北京五輪は8月13日に切って落とされる。

(学生記者　野口未由希＝文学部2年)

北京オリンピック出場

全日本男子バレーボール
福澤達哉さん（法学部4年）

チーム最年少も、最高到達点はチーム2番
どこまで通用するか、自分の限界みてみたい



6月7日、世界最終予選対アルゼンチン戦で16年ぶりの五輪切符を手にした全日本男子バレーボール。そのチームの最年少で北京五輪に臨むのが、福澤達哉さん（法学部4年）だ。189㎝と決して大きくない身長ながら、全日本チーム内で2番という最高到達点357㎝の跳躍力を武器に、世界に挑戦する。

楽しめたアルジェリア戦

――北京五輪の出場権獲得、おめでとうございます。

福澤　ありがとうございます。アルゼンチン戦ではベンチもコートも一丸となっていたので、全員で喜びを分かち合えました。皆それぞれの思いで北京を目指していましたけれど、出場が決まったときは皆一様に同じ気持ちを共有していた。その瞬間がとても良かったです。

――植田辰哉監督が泣いてコートに倒れこむ、感動的なシーンもありました。

福澤　監督は非常に厳しい方で、練習中はなかなか笑わない。常々「自分の信念を持てばオリンピックにも出られる」と話していました。監督が泣かれたのは、選手と一緒に辛い思いをずっと分かち合ってきたからだと思います。その姿を見て感慨深いものがありました。

――北京行きが決まった翌8日の対アルジェリア戦では、第2セットで大活躍でした。

福澤　最年少ということもあって、アルジェリア戦まではワンポイントで出ることばかりでした。初戦のイタリア戦ではスパイクを2回くらい打ちましたが、それでもワンポイントブロックや、ピンチサーバーでした。ずっと出たいという思いがあったので、アルジェリア戦は緊張するというより、楽しかったですね。

――そして、7得点を取る活躍をしましたね。

福澤　ある程度世界にも通用する、ということを確認できました。でも今後、対戦相手のレベルが高くなってくると、今のままの打ち方じゃ駄目だとか技術を磨くことを考えていかなければならない。アルジェリア戦で1セットとれたのは、今後の自分にとって、これくらいやればできるという、一つの基準になる試合でした。

大学3年で意識した五輪

――オリンピックを意識されたのはいつ頃からですか？

福澤　大学3年生の時です。1年の時に、全日本に初めて呼ばれたんですが、その時はチームの一員というよりは、呼んでいただけるだけでもありがたい、という気持ちでいたんです。去年のワー

福澤達哉さん

ルドカップの時に、最終選考まで残っていたのですが、自分はメンバーに残れなくて、同い年の清水（邦広）選手＝東海大４年＝は選ばれた。だから今回こそは全日本で残りたかったんです。それにオリンピック出場は16年ぶりの大仕事。北京オリンピックのメンバーの一人になりたい、という思いが強くありました。

——中大のバレーボール部のキャプテンを務めていた頃と重なりますね。

福澤　そうです。キャプテンとして大学ではあまりいい成績を残せず、部活が大事な時にキャプテンが抜けるという後ろめたさがあったので本当は迷っていました。部の監督や中大のチームメイトといろいろ話をして、最終的に自分自身が一番何を求めているのかを突き詰めて考えました。そして悩んだ結果、外国に挑戦できる機会があるのであれば挑戦したい、という思いになった。最後まで自分を理解してくれた監督やチームに支えられて決断しました。

弁護士を目指して中大に入学

——高校は京都の名門・洛南高校。中央大学を選んだのはどうしてですか。

福澤　少し言いにくいのですが、もともとは他大を志望していました。高校では、その大学に指定校推薦があったのですが、自分の代でその推薦がなくなって。そんな時、中大から熱心にオファーをいただきました。法学部以外の学部に行く気持ちにはなれなかったし、親の世代に中大の法学部が良いと聞いたことや、バレーも1部リーグだったので指定校で法学部に行こうと思い、進学を決めました。

——法学部にこだわった理由は？

福澤　理系が駄目で（笑い）。法律の勉強がしたいと思ったんです。司法試験も目指せるのであれば目指してみようかな、と。スポーツだけじゃなくて、自分の興味のある、法律などの勉強ができたらいいなと思ったので、文武両道は自分にとって一つの目標です。

——メディアでは弁護士志望と言われて

バレーを語るときの眼差しは厳しい

いますね。その志は今も？

福澤　よくマスコミの方からは聞かれるんですが、高校時代の取材で言ったことをずっとひっぱられているんですよね。今となると恥ずかしい（笑い）。大学に入った頃は勉強とスポーツは半々くらいで、1年くらい法律の勉強をしていました。でも、本格的に法律の勉強しようと思うと時間がかかり、自分には厳しいと分かってきました。そんな時に全日本からのお誘いがあり、バレーへの比重が大きくなっていきました。

弁護士は一つの選択肢としては、まだ残っています。ただ今は、背が高いわけでもない自分がどこまで世界に通用するのか、限界をみたい。まだまだプレイは伸びるし、対抗できると思っているうちはバレーを続けたいと思っています。

跳躍力と技を武器に世界に対抗

―― 福澤選手のプレイで印象的なのは、なんといっても跳躍力ですね。

福澤　身長が低い分、飛ばないと駄目なのでそれを最大限に生かしたプレイをしたいです。跳躍力は鍛えればある程度はいくんですが、それ以上はもともとの身体能力も必要になるので。今、最高到達点の記録が３ｍ57㎝で、全日本で２番目の数字を持っています。

―― 跳躍力が自分の武器だと気づいたのはいつ頃ですか。

福澤　中学の頃ですね。ジャンプ力はもともと自信がありました。高校では３ｍ45㎝の記録を持っていました。中学と比べると高校で15センチ、大学に入って10センチ記録を伸ばしました。身長は中学3年で１８６センチあったので、結局３センチしか伸びてないんですが（笑い）。

―― 全日本1番の選手も中大にいた方ですね。

福澤　そうですね。1番は松本（慶彦）さんで、中大のバレー部にいた方です。身長は１９３㎝で、最高３ｍ５８㎝を出しています。自分は、合宿の測定で３ｍ５７㎝なので、１㎝違いですが、Vリーグを通して松本さんが1番です。

松本さんは手が長いんですよ。ジャンプで飛んでいる高さで言うと、自分の方が飛んではいます。

―― 身長１８９㎝というと、男子バレーでは決して高くはないですね。高さを気にすることはありますか。

福澤　２ｍの選手とかが来ると恐怖はやはり少し感じます。でも、高さ負けはしていない。また、打ち方を常に考えるようにしています。そういう意味では、日本人は技術力でカバーしている面が多いですね。自分もブロックアウトなどの技術を身につけていきたいです。

あだ名は「ゆきち」、福澤なので…

―― バレーを始めたのはいつからですか。

福澤　小学校4年の時に、兄がやっていたのをきっかけに始めました。たまたま小学校にバレーを教えてくれる先生がいて、週に2、3回教えてくれました。中学から部活として大会に出るようになりました。

――同年齢の東海大学の清水（邦広）選手とは仲が良いんですか。

福澤　高校から知っている仲で、対戦したこともあるし、2人で合宿などを一緒にやってきているので、個人的にも仲がいいですよ。清水みたいに同期で砕けた感じで話せる奴がいるのは嬉しいですよ。

――清水選手のことはなんて呼んでいるんですか。

福澤　普通に「清水」です（笑い）。向こうも「福澤」と呼んでいます。でも自分は全日本では、「ゆきち」と言われています。福澤だから「ゆきち」。「ゆきち」はないですよね（笑い）。

――厳しい練習をやりきるパワーの源はなんですか。

福澤　昨年のワールドカップや今年の合宿は、確かにキツイ練習がありました。でもオリンピックに出るという目標があれば、プラス思考になれます。「キツイ練習」というとマイナスに考えがちですが、自分自身がしっかりしていれば、プラス思考で自分の目標を持てると思います。

とびっきりの笑顔の福澤さん

北京はロンドンへの一里塚

――今の目標は。

福澤　まずは、本戦（北京五輪）に出ることですね。最終予選のあと、6月中旬から行われるワールドリーグなどの結果を踏まえて、ベストメンバーが選出されます。自分の場合は、前戦で活躍していたわけではないので、まだ本戦に出られるかは分からないんです。

――体育連盟の『TaiRen』創刊号で、福澤さんはロンドン五輪（2012年）を目指しているという記事がありました。北京五輪は想定していなかったんですか。

福澤　清水（邦広選手）と僕は北京オリンピックに行けたとして、ベンチスタートです。その次のロンドンは自分や清水が26才になるので、その頃には自分たちがメンバーの中心になってくるであろうと思っています。ロンドンは一つの基準です。

――北京五輪をどんな経験にしたいですか。

福澤　一度世界を経験して、それから力が発揮できると自分は思っています。女子のチームもアテネと今を比べると安心して見ていられる、というのがあります。北京オリンピックはロンドンにつながるいい経験になると思います。ワールドリーグでしっかりアピールして、本戦に残れるように頑張ります。

（学生記者　池内真由＝法学部4年）